

離陸決定速度

野瀬 隆平

飛行機が滑走路を走りだし、離陸すべくスピードを上げて行く。パイロットは、計器に目を配り、異常が認められないか確認する。管制官からは離陸の許可を得ているものの、安全に離陸できるか判断する。

ある一定のスピードを越えると、もはや離陸するしかない。滑走路内に安全に止まることが出来ないからである。オーバーランすれば、間違いなく機体は損傷し乗客は危険にさらされる。この離陸を決断すべき速度の限界が離陸決定速度である。

乗客は搭乗しており荷物も積み込まれている。予定通り飛ばないと大きな影響がでる。乗客や航空会社のみならず、多くの人たちに結果は波及する。離陸という判断を短い時間の中でしなければならない。

決定するのはパイロットであり、許可を与えた管制官も離陸に関与しているが、その背後に利害関係者がいるのも事実である。あえて言うなれば、その人達は何か事故が起きても、彼ら自身に危険が及ぶことはほとんど無い。被害を受けるのは、飛行機に乗っている人たちであり航路の下に家を構える住人たちである。

感染症が世界中に蔓延している中で、多くのリスクが予見されるにも拘わらず、オリンピックを開催することになってしまった。中止する機会を失ってしまったのである。飛行機の離陸に例えれば、離陸決定速度が超えてしまったのだ。

腹立たしいのは、引き返せないところまで来た途端に、関係者や評論家が色々と意見をいい始めたことだ。いわく、実はこんな問題があったのだ、あの時中止を決定しておくべきだった、云々。今ごろ言って何になるのだ。自分は問題があることを事前に指摘していたという、アリバイ作りをしているようなものである。

いったん決めたことは、多少のリスクには目をつぶって強行してしまうという悪い習性があるようだ。

飛び立つところまで来てしまった今、文句を言っても始まらない。危険にさらされる我々が、出来る限りの予防措置を講じて自分の身を守るしかない。